

(様式2)

「秋田大学学生海外短期研修支援事業」実施報告書（参加学生）

平成23年10月14日

所属：教育文化学部国際言語文化課程国際コミュニケーション専修 学年：2

氏名：山下 あゆみ

研修先大学・機関名等（国）： フライブルク大学 （ドイツ）

在籍身分：短期留学生

渡航年月日：2011年08月06日

帰国年月日：2011年09月03日

○研修先での学習内容等

プログラム初日にプレイメントテストが行われ、各自のレベルに合わせたA～Jのクラスに割り振られ授業を開始した。クラスによっては日本語での授業もあったが、私が所属していたAクラスは担当教員が日本語を話せない先生で、授業はドイツ語、又は英語で行われた。内容は、ドイツ語で書かれたテキストを使用した基本文法（ほぼ秋田大学での「入門ドイツ語」「基本ドイツ語」で習ったもの）のおさらいと練習。会話中心というよりはテキスト中心だった。時々生徒の要望に沿って、ドイツの歌を歌ったり、朝市に連れて行ってくれたりと工夫がなされていた。

講義は午前中のみで、90分の授業が2コマ行われた。9時～10時30分の1コマと、11時～12時30分のコマであり、その間には30分の休憩を挟んだ。午後には日によって日本語によるドイツの文化についての講義が行われた。この講義も90分で、強制ではなく自由参加だった。

プログラムの最後にはレクレーションプログラムとしてクラスごとの発表があり、私たちAクラスはドイツ語の音を感じるということを中心に、ドイツ語の早口言葉とドイツ語の詩の朗読をした。他のクラスは歌を歌ったり、劇をしたり、各々のクラス独自の出し物だった。

○研修期間の生活面について

スタッフにより事前に割り当てられた学生寮に入寮。私が割り当てられたのは大学から路面電車で5駅の寮。部屋は個別だが、キッチン、リビング、トイレ、シャワーが共同だった。個人部屋にはベッド、机、クローゼット、本棚が備えつけられていた。寮は男女混合だが、個人部屋があるので特に問題はなかった。

時々寮生との交流の機会があり、一緒にベランダで涼んだり、外で遊んだりした。寮生のほとんどは英語を話せたので、会話する時は大体が英語によるものだった。そんな中、運よく隣の部屋の男子学生が日本語を勉強中のドイツ人だったので、彼とは私がドイツ語で、相手は日本語でといった具合にお互いに練習しながら会話をした。

(様式2)

食事に関しては、朝食は町のパン屋さんで購入し、昼は学食、夜は大体食べなかった、といった感じだった。というのも、お昼の学食の量が多かったので夕飯を食べる気にならなかったためである。寮で何か食べるときは既製品を買っていたので、寮のキッチンを使用しての自炊はしなかった。

○研修期間全般にわたる感想

初めのうちはドイツ時間になかなか慣れることができず時差ボケに苦しんでいた。初めての海外だというのはもちろんだが、日本よりも日が落ちるのが遅く、夜の九時でも日本でいう夕方並みに明るかったことも時差ぼけが長引いた原因の一つだろう。

滞在中はほぼ晴れだった。日本のように湿っておらず、カラッとされていて気持ちよかったが、日差しが強くだいぶ日に焼けてしまった。しかし夜や朝方は冷え込む日もあった。私は長袖のパーカーを持参していたのですがすぐに気温の変化に対応できたが、羽織るものを用意していなかった人はやはり寒かったようで、到着後すぐに上着を買っていた。

フライブルクの人はみんな優しく親切で、困っていた時に声をかけてもらったことが多々あった。その際、私がいあまりドイツ語を話せないとわかるとすぐ英語に切り替えてくれて驚いた。初めから英語で話しかけてくれる人もいたくらいだった。

現地の人との交流を通して感じたことは、物事をはっきりさせることが大事だということだ。買い物をして会計の時に金額が聞き取れなかったり、何を聞かれているかわからなかったりした時に、聞き返しにくいからといって遠慮してしまったことがあったのだが、そういうときはたいていお互いがもやもやして嫌な雰囲気になってしまった。だが、わからないことはわからない、もう一度お願いと言えばみんなきちんと返してくれ、そのあとも笑顔で別れることができた。わからないことははっきり聞くという当たり前のことが大事だと実感した。もうひとつ大切だと思ったのがあいさつだ。お店に入る時やスーパーでの会計の時には「Hello」、会計後は「Danke (ありがとう)」と「Auf Wiedersehen (さようなら)」という一言を言うと、みんな笑顔で返してくれた。日本ではお店に入る時などは挨拶をしないので新鮮だった。挨拶をすることで空気が和んだし、それをきっかけに話しかけてくれた店員さんも多くいて、こんな何気ないコミュニケーションが大事なのだと思った。初めは戸惑ってなかなか挨拶ができなかったのだが、慣れてくると無意識に自分から挨拶するようになっていた。日本ではどちらかというと自分から人に関わるのが苦手だと思っていたので、自分から話しかけるなど積極的に動ける自分を知って驚いた。

今回のドイツ研修は語学力の向上はもちろん、異文化社会との交流を通して自分の視野も広がり、とてもいい経験になった。また、ドイツでの暮らしを通して改めて自分を見つめ直し、自分の可能性を再発見できたので、約一ヶ月という短い滞在期間だったが、得るものは多かった。今回ドイツで学び感じたことを、これからの生活でも生かしていきたいと思う。

○今後の勉学計画

(様式 2)

このプログラムに参加する前からラジオやテレビなどの語学学習番組を利用して自主学習をしていたので、それを今後も継続し、更に現地で購入した本を読んでいこうと思う。あと、春休みに他大学主宰で行われるドイツ語学習者向けの合宿プログラムへの参加を考えている。



フライブルクのゴミ処理場を見学



プログラム事務室の様子



朝市